

映画「家族」と福山

山田洋次監督による 1970 年上映の「家族」を久しぶりに見た。心に残る作品は何回見ても感動するものだ。作品全体については、また別に書くことにして、ここでは福山の場面に焦点をあてたい。その理由は昨年につづいて福山市立女子短大へ集中講義に出かけたので、福山について語りたいためだ。



今回「家族」を見ていて、福山の場面が印象的だった。長崎から列車で北海道の果てまで旅をするわけだが、途中の福山で笠智衆が演ずる爺ちゃんを製鉄所に勤める弟夫婦に引き取ってもらうために立ち寄る。家族が降りた福山駅のホームから福山城がよく見えた。いまは新幹線のホームからしか見えないが。日本鋼管(現在は JFE)に勤める弟夫婦の生活も、ローン漬けで厳しい。結局、爺ちゃんも北海道に行くことになり、別れの際に爺ちゃんが「これで最後かも」と告げたのに対して、前田吟が演じた弟の涙が心に迫る。炭鉱に見切りをつけて北海道まで行く兄夫婦、製鉄所で働く弟夫婦、それぞれが生活に追われている。高度成長時代の「風景」が福山を舞台にシビアに描かれる。

さて、映画から集中講義に話を移そう。7月下旬の土日の3日間をつかって講義を行った。昨年は9月だったが、7月後半の猛暑のなかでの集中講義となった。DVDをセットしてもらった教室で、たっぷりビデオをつかって講義を進めた。昨年と同様に学生の評判は「わかりやすく刺激的」と好評のようであった。写真は学生のもとの撮ったものだ。やはり福山は魚が美味しいので、また機会があれば行ってみたいものだ。



(8月6日 記)